
桜花別記

セイシロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜花別記

【Nコード】

N33690

【作者名】

セイシロウ

【あらすじ】

かつて大陸を支配していた「神王」

それに立ち向かった「赤き髪の魔女」

1000年の時を経て神王の封印は解き放たれる。

時を同じくして、魔女も起こされた。

桜花国の未来をかけた戦いは、もう始まっていた。

第一話　復活

約1000年前のこと。

この大陸は4人の「神王」>しんおうくが支配していた。彼らは強大なる魔力を持ち、互いが互いを滅ぼすために戦争をしていた。長く神王の兵士として使われてづけてきた人間は、あるとき彼らに疑問を抱く。

彼らがやっていることは、正しいのか

その思いは長い時間、神王達に虐げられてきた人間の間でみるみる内に膨張していった。

そしてついに大規模な反乱という形でその思いは爆発した。

あまりの不意打ちに初めこそ神王達は戸惑ったが、それもつかの間のこと。神王達の圧倒的な魔力に立ち向かう人間など、神王にすれはうるさい蚊のようなもの。神王はその大きすぎる拳で少し払えばいいだけだった。

そしてまさにその力が振り下ろされようとしていたとき、「彼女は現れた。」

赤い髪の少女。記録にはそうしか残されていない。だが彼女が人間の危機を救ったことは間違いなかった。

神王にも匹敵する魔力を持った彼女は、人間達とともに立ち上がり、長き戦いを経て神王を打ち破った。だが、彼女は戦いのさなか深い傷を負った。そしてそのまま眠りについた・・・。

「目覚めよ・・・偉大なる魔女よ・・・」

「禁」と彫られた石の前で、3人の男はただ押し黙っていた。何かが起こるかのよう、いや何かが起こることを期待しているかのように、石をただひたすら見つめている。しかし何も起こりはしなかった。

「おいカスミ、こんなんでも本当に目覚めるのか・・・？」

桜花国国王のヒヨウは、いぶかしげに尋ねた。

「・・・さあ？」

「・・・」

カスミは至つてまじめに答えているのだ。

「記録には詳しい起こし方までは書いていませんから」

「陛下、所詮伝説は伝説だったと言うことですよ。そんな伝説は忘れて、早く国に戻りましょう」

イカヅチはそうぼやいた。どうもこんなところは出て、早く国に戻りたいという感じだった。

「いや、できることはやつておきたいのだ。・・・それがたとえ伝説であつても」

イカヅチは少しあきれたようにため息をついた。

「やり方を変えてみましょう。念話を通じるか試してみます」

そう言つとカスミは目を閉じ、瞑想に入った。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

3人の沈黙が洞窟の中に広がつた。と、そのとき。

「！」

「何だカスミ」

「聞こえました・・・」

カスミは静かに言つた。

「聞こえるようにします・・・」

そついうと、またなにやら下を向いた。

「・・・た・・・すか・・・」

「なんだ？」

ヒヨウは耳を澄ませた。

あなた方ですか・・・わたしを呼んでいるのは

「あなたが伝説の魔女か？」

ヒヨウは聞いた。石に向かつて。

はい

その答えを聞いたヒヨウはしっかりと話し始めた

「私は桜花国現当主のヒヨウだ。実は先日神王が復活した。今我々は神王の襲撃を受けている」

・・・

魔女は黙ったままだ。ヒヨウはさらに石に近づいた。

「だから眠りから覚めて、我々とともに戦って欲しい」

ん・・・ああ・・・そう言うことか

「まさかほんとにいたとはな」

イカヅチが信じられないような顔で立っている。

全員が魔女の次の言葉に耳を傾けている。

あの・・・

「何ですか」

ヒヨウは答えた。

まだ・・・眠いんですけど・・・

「・・・!？」

全員が同じ事を思ったに違いない。魔女って天然か・・・？
そしていち早く突っ込んだのはヒヨウだった。

「あほかぁ！早く起きろ!!」

ん・・・わかりましたよ・・・

魔女はそう言った。とたん、洞窟が揺れ出した。

「おいカスミ何だこれは」

イカヅチが不安そうに言う。

「多分・・・魔女の復活の勢いで揺れているのかと・・・」

「おい、それってやばくないか・・・」

3人の思考回路は一瞬停止した。そして頭より先に体が動き出した。

第二話　神王

「ふう・・・」

後ろを振り返ると今まで自分たちがいた洞窟は、無残に崩れ去っていた。

「危なかった・・・」

イカヅチはため息混じりにつぶやき、その場に座り込んだ。

「復活だけであれほど危ない思いをさせられては」

ヒヨウは洞窟を（いや、洞窟だったところを）見ながら言った。

「よほどすさまじい力だな」

「ええ、何せ１０００年もの封印が解けたのですから。あのくらいですんだのはむしろ奇跡でしょう」

カスミよ・・・それが分かっているならどうして先に言わなかったのだ。と、イカヅチもヒヨウも思ったに違いなかった。しかし今はそれよりも重要なことがある。

「・・・魔女殿は？」

ヒヨウが尋ねた。

「・・・あのお、ここにいますけど」

「・・・！」「・・・！」「・・・！」

３人はそろって同じ反応を示した。

「いつから」

「さつきから」

「・・・」

なぜ声をかけないのかとか、何で気配がなかったのかとか、危うく死にかけそうだったのだとかいろいろひっくるめて

「喋れや・・・！」

「そ、そんなにツツコまなくても」

ヒヨウは半分あきれ顔でいたが、すぐに平静に戻り。

「先ほど話したかと思うが私は桜花国国王のヒヨウだ。そしてこい

つらが・・・」

イカツチとカスミを指して次を言おうとしたが、魔女に遮られた。

「親衛隊のカスミさんと、同じくイカツチさんですよね。神王の封印が解けてどうしようもないから私を起こしに来た・・・と言うことですよね？」

物わかりがいいというか、これは読心術だ。

「初めまして。私がレンです」

伝説通りだとヒヨウは思った。赤い髪の少女、今は見た目二十歳前後か。魔力のようなものは今は感じない。

「情報がもうちょっと欲しいですね・・・。予知をしてみましようか」

そう言うと、レンは目を閉じカスミが洞窟の中で念話をしたときのようになった。

「・・・」

しばらくするとレンはふらふらと動き出した。

「あっちから感じる・・・」

ふらふら

「おい、あまりそっちに行くと・・・」

ヒヨウの制止はちよつと遅かった。レンは見事に谷に落ちていた。

「ほんとに落ちた・・・」

カスミは口がふさがっていない。

「いたい・・・」

「痛いすむのか」

「大丈夫です・・・。自分で治しました」

一同ため息。これ・・・大丈夫か？

「で、何か分かったのか？」

ヒヨウは早速聞いた。

「あ、はい。神王の軍勢がこちらに向かっています」

「ほんとか！」

「ええ。詳しく言えば神王の軍勢の『半分』です。残りの半分はお

城に向かっています」

皆は顔をしかめた。イカツチは慌てた様子が口調に出ていた。

「なら、早く城に戻らないと」

「ヒヨウさんはお城に戻ってください。イカツチさんと、カスミさんは私と一緒に敵を迎え撃ちます」

ヒヨウは馬に乗った。

「そうか。なら・・・」

「あ、今から普通に帰っても間に合いませんよ」

「じゃあ、どうすると・・・」

「飛ばしますので」

「飛ばす・・・?」

「じゃあ、いきますよ」

「ちょ、待て飛ばすって・・・」

「せ」の

ばす!としか書きようがない音を残してヒヨウは空へと旅だった。

「ほんとに飛ばした」

「ああ、飛ばした」

カスミとイカツチはあつて間もないレンに飛ばされるヒヨウを思った。

レンはすでに戦う体勢に入っている。

「・・・来ます!」

「おうおう、ほんとにたくさん来たぜ・・・」

イカツチは腰から黒い刀を抜いた。

「気をつけてください。相手は擬精霊です。」

「何度も戦ったことがありますので、大丈夫ですよ」

カスミは結界を張った。

「このくらいなら隊長一人でもいけるでしょう」

「ほんとにさせる気じゃねえだろうな」

カスミは微笑を顔に浮かべた。

「来た」

前から突っ込んでくる擬精霊にレンは迅雷を放つ。一瞬にして青白い光が走り、擬精霊は消え去った。

しかし、前からの敵に気を取られたレンに、後ろからさらに襲ってきた。

「ぬうううおおう」

レンと擬精霊の間に立ちはだかったイカツチは十把一絡げを繰り出す。衝撃波が刃のように伝い、一気になぎ倒した。

「ほんとにあなたたち常人離れしてますね・・・」

「・・・ほめ言葉だな」

集中力を欠いたレンにすかさずカスミが鰯の頭を唱える。

「ほ・・・」

「どうです？特製ですよ」

「・・・生くさい」

低位擬精霊と高位擬精霊の攻撃をしのいでいると、前方からさらに一団がやってきた。

「アレは・・・？」

今までのとは絶対的に違う大きさの擬精霊がいた。

「聖位擬精霊です。攻撃力も体力も全く違いますよ」

カスミが飯綱を食らわせてみるが、効いたような気配もない。

それどころかこちらに向かって攻撃を返してくる。

「仕方ないですね。めんどくさいので・・・」

レンは集中力を集め、聖位擬精霊をにらんだ。すると周りに炎が走り一気に燃やし尽くした。

「ふう」

「これが魔女の力ですか・・・」

目の前の擬精霊の軍団をようやく退けた。

そのとき、レンの動きが止まった。

「どうした・・・」

「神王が・・・来ます」

「なっ・・・！」

「みいつけた！！」

声は上から降ってきた。

全員が上を見上げたとき何かが降ってきた。

「これが、神王・・・」

「今までとは格が違いすぎますね」

神王はレンを見つけると笑いながら言った。

「レーン。久しぶりだね。あんたに封印されてからこの1000年間、あんたを殺すことだけを考えてきたんだよ」

「・・・あなたは何も変わっていないみたいですね」

「別にいいんだよ。あんたを殺せればね！」

そう言うといきなり攻撃をしてきた。

「ぬっ・・・」

イカツチが食らったようだ。

「イカツチさん！」

神王はまだ笑っている。

「仕方ないですね」

レンは最大限の力を集約した。周りの草がざわめくように揺れている。

彼女自身からもとくとくとあふれ出る闘気が全ての空気を固めたようだった。

そしてレンは目を見開く。刹那神王の体は火に包まれ、その勢いは激しさを増した。

「くっ・・・、起きたばかりのくせに、ずいぶんと動きがいいじゃん」

神王は逃げを選択したようだ。うつすらと見えなくなっていく神王は消える直前に捨て台詞を残した。

「次はこうはいかないよ・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3369o/>

桜花別記

2010年10月16日21時12分発行